

接骨木

著 者 略 歴

明治34年10月19日埼玉県岡部町西田に生れる。

俳 歴「寒雷」暖響作家・「杉」同人

現代俳句協会会員

前埼玉県俳句連盟会長 現同連盟名誉会長

現住所 大宮市東大成町 1—617

T E L 0486—66—1062

本書は限定版です。

塚本忠句集・接 骨 木

1978年11月 1 日

¥2,300

著 者

塚 本 忠

発行者

萩 原 廼 夫

発行所

(株) 芸 風 書 院

東京都文京区本郷 1—15—4

文京尚学ビル 4 F (〒113)

電話 (03) 814—9591 (代)

振替 東京 0—4781

印刷 (株) 上野印刷所

デザイン・岡田威久子

編集・森田公司, 岡田青虹

矮骨木



著者近影

序にかえて

森 澄雄

晩秋の横川は少し肌寒かった。数ある堂塔の中で、あの恵心堂の小さなたたずまいが、いかにもしんと澄んでいて心に残った。縁側に干されていた洗い立ての大根が暮れ方の光に白く、その中に小さな二股大根があったのも印象的だった。

恵心堂はここで恵心僧都、つまり源信が『往生要集』を書いたところといわれる。恵心僧都は『源氏物語』の「宇治十帖」の中に投身した浮舟を助ける「横川の僧都」として描かれているが、宗教的にはそれまでの自力信仰から法然・親鸞の他力信仰を生む、その発端の、あるいはその過渡期の僧であろう。なお、自力と他力が混淆している。

『往生要集』は、そのはじめにすさまじい地獄の様相が描かれていることで有名であるが、ぼくには念仏の段階を説いたところが面白かった。はじめ「別相観」といい、阿弥陀仏を頭頂の肉髻、髪の毛、髪の毛の光明から足下の千幅輪に至る四十二相に分け、その一つ一つの特徴をつぶさに観想しながら念仏する。それが出来ると次に「惣相観」といい、阿弥陀仏を全体として観想しながら念仏するのだが、それが難かしい者は「雑略観」といって仏の白毫相だけを観想しながら念仏する。これは俳句、あるいは写生の修練の段階とみても面白いであろう。だが、これらの観法は念仏としてまだ窮極のものではない。彼は念仏の極

意として「如想念」を説く。その文章が面白い。

「また舍衛に女ありて須門と名づく。これを聞き心に喜びて、夜夢に事に従ひ、覺め已りてこれを念ふに、彼も来らず我も往かざるに、しかも樂しむ事、宛然たるが如し、当にかくの如く仏を念ずべし」

これも俳句の窮極ととって面白いが、ぼくには人間のもつ性をも大きくつつみ込んで、源信のいいようないやさしさとして心にしてみた。

集名「接骨木」は集中の

接骨木の芸なしの花女塚

の一句から採られたという。「芸なしの花」が面白い。三、四月の頃、淡黄白色の小花をたくさんつける接骨木は、春の多彩な花々の中で、まこと芸なしの花。「女塚」はごく一般的に不遇のうちに世を去った女の塚ととってもいいが、あるいは亡き妻女の墓ではなからうか。「芸なしの花」は一抹の自照のユーモアをたたえながら、女塚を悼んで不思議なあわれのただよう一句である。塚本さんらしい円熟の一句であらう。

塚本さんは今年七十七歳、いわゆる喜寿の高齡に達せられた。『接骨木』はそれを祝う記念の一集であらう。その塚本さんとも俳句の先輩としての交友、既に三十年になろうかあまねく人も認める朴直醇厚の仁。俳句もまたその正直せいちよくの詠法から、その醇朴を貫いて今日の作風に至っているといっている。

鶉鳴く松の中なる山漆
錦鯉降り込んで雪白き水
綿虫の見えずなりたる夢の先
春蘭や裏側に陽の通りをり
鳶飛ばぬ日和を穴の赤棟蛇
虎鵠来て田向ふの芽吹きそむ
雪女郎雪のおぼろの檣林
独活の実のぬくさうな黒鷯の声
重なって滝音の澄む一つかな

の滋潤な味わいをもつ純粹の自然詠、また

花 薙 往 生 際 の 話 など

梅切らぬ馬鹿の畑の四十雀
湯の柚子の腰の辺に触る慎めり
仏画見る秋思仏ともなりきれず
冬至十日前の油菜田におろす
香水にふとある浮気心かな
木にオーバ！懸けて八日の甘茶仏

詫びに來しこの冬帽のおきどころ
望の夜の影の抜けたる歩みかな
熟れそめし柿や二本の齒の弛み

などの人事詠にも、時に孤心の澄み、時にあたたかい飄々のユーモアを漂わせながら、その醇朴を貫いて自在の詩心を加えた、これは見事な塚本さんの円熟であろう。

法然の、乱世、庶民の切実な問いに答えた「百四十五箇条問答」の中に次のような問答がある。

「酒飲むは罪にて候か」

「まことは飲むべくもなければ、この世のならひ」

よくには「この世のならひ」が有難い。「この世のならひ」がまたもっともひろやかな俳諧の所在であろう。そして「この世のならひ」に世の辛酸をふくめれば、塚本さんもこの世の辛酸を、また人以上になめてきた人であろう。それ故にいいよやさしく、正直と醇朴を貫いて、その心を深めてきた人といえようか。

句集「接骨木」の見事な達成を讃えて、更に次の一集を編まれることを期待しておきたい。

昭和五十三年十月一日

目次

題簽

加藤楸邨

序

森澄雄

仕事始

昭和五十二年……（八十六句）……………13

山繭

昭和五十一年……（五十句）……………43

肺活量

昭和五十年……（三十八句）……………61

破魔矢

昭和四十九年……（二十七句）……………75

枳殻の実

自昭和四十五年
至昭和四十八年……（五十五句）……………85

紫陽花

昭和四十四年……(二十句)……………105

野分の鶏

至自昭和四十二年……(二十七句)……………113
昭和四十三年……

蝸牛

至自昭和三十一年……(四十五句)……………123
昭和四十一年……

万年青の実

至自昭和三十三年……(三十六句)……………139
昭和三十四年……

鈴懸の花

至自昭和三十三年……(五十七句)……………153
昭和三十九年……

夜の雪

至自昭和二十八年……(五十句)……………173
昭和三十四年……

跋

佐久間東城……………191

あとがき

塚本 忠……………196

接
骨
木

塚
本

忠
句
集

仕事始

昭和五十二年
八十六句

足 早 に 朝 の 人 過 ぐ 葱 坊 主

荒 る る ほ ど 女 華 や ぐ 春 疾 風

苗 木 掘 る 力 ま ず に 根 を 分 け な が ら

矢印は民宿へめまとひ・みちをしへ

熟れそめし柿や二本の齒の弛み

三条の橋際に売る兜虫